

生きている者の神

ルカ20:27~38 / 李正雨師

ある日、うちの長男が私に質問をしてきました。「パパ、昔は神様と話し合った人がいたのに、どうして最近では、神様と話し合っている人はいないの？」このような質問をしたのは、こども礼拝の時間にアブラハムやモーセの話聞いたからでしょう。山野さんからこのようなことを問われたと聞いたので、幸いに私は答える準備をしていました。「その時は教会や聖書もなく、神様について知ることができるものは何もなかったから、神様が直接人と話し合ったのではないだろうか。」すると、長男は「今は神様について知ることができるものがあって、神様が人と話をしないの？」と聞いて来ました。「うーん、神様が私たちとまったく話をしないわけではないの。神様は聖書を通して私たちに話しかけ、私たちは祈りを通して神様に話しかけているの。だから、聖書を読むのと祈りを忘れたらだめだよ。」「あ〜〜そうなの。分かった。」

時には、子供たちの質問が鋭い時があります。そうでしょう。このような原初的な質問は、誰でも気になっているものだと思います。それで多くの方は、このような質問をして、教会はこれらの質問について答え始めました。そして、このような質問と答えによって、教会は、神学という学問をより固めることができました。しかし、相変わらずこのような質問は、答える側を慌てさせます。だから私は、自分が知らないことについて尋ねられたら、紙に書いてポケットの奥によく入れてくださいと言います。そして、ぜひ神の国に行ってみてくださいと言います。神の国では、私たちのどんな質問にも答えられるでしょう。

今日の福音書でも、このような難しい質問が出てきます。復活についての質問ですが、この質問は、いくつかの意図が隠された質問でした。まず27節から見てみましょう。「さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。」今日の福音書で登場している人物は、サドカイ派の人々です。皆様も、サドカイ派の人についてたくさん聞いておられたと思います。ところが、意外に福音書でサドカイ派の人々が登場する場面は、多くありません。ほとんどの議論の場面では、主にファリサイ派の人々や律法学者たちが登場し、奇跡や教えの場面では、主に普通の人々が登場しています。福音書でサドカイ派の人の登場は、異邦人の登場ほど見つけることが難しいのですが、これはサドカイ派という特殊性があるからです。サドカイ派の人々は、身分の高い人でした。祭司長たちや貴族たちによって構成されていたので、少数であり、ほとんど政治的な人々でした。それで、イエス様が大きな勢力を得るまでは、イエスという人物に大きな関心を持ちませんでした。これに反して宗教的であったファリサイ派や律法を研究した律法学者たちは、イエス様とぶつかる場所が多かったので、福音書によく登場したのです。ところが今日の福音書では、ファリサイ派の人ではなく、サドカイ派の人が登場し、彼らはイエス様に答えにくい質問をします。これはイエス様に従う人々が多くなったということの意味するものであり、サドカイ派の人々もイエス様を牽制し始めたということの意味するのだと思います。

今日の福音書では、彼らを「復活があることを否定するサドカイ派の人々」と紹介します。これは、当時のサドカイ派の人々は、復活を認めなかったということでしょう。当時のサドカイ派の人々は、自分たちの聖書として、トーラー、創世記から申命記までを受け入れていましたが、トーラーには復活についての言葉が書かれていません。反対に、ファリサイ派の人々は復活を信じていました。なぜなら、彼らは旧約聖書全体を聖書として受け入れ、いくつかの言い伝えも認めていたからです。サムエル記上(28章)やダニエル書(12章)には、復活の根拠として見られる文章が書かれており、ファリサイ派の人々は来世も信じていたので、死者が復活すると信じていました。しかし、この復活には、いろいろな問題がありました。当時のファリサイ派の人々は、死んだ人がそのまま復活すると信じていたので、彼らの復活には多くの問題が提起されました。生前の姿のように復活したら、主人と僕の関係はどうなるのか？体の不自由な人はどうなるのか？復活によって、この世の不合理的なことも続くのか？いつ頃の姿で復活するのか？どんな服を着て復活するのか？など、復活による難題が山積みになっていました。そのため、トーラーだけを受け入れたサドカイ派は、このような矛盾によって復活を受け入れず、この世に忠実でした。ところが、面白いのは、今日の福音書のサドカイ派の人々は、このような矛盾によって自分たちも信じなかった復活をイエス様のところに持って来たということです。これは、質問の意図が正しくなかったということを示すことです。

彼らはイエス様にレビラート婚という制度について話します。これは申命記25章に書かれていることとして、モーセがユダヤ人に与えた制度です。この制度には目的がありましたが、それは兄弟の家名を守り、当時の弱者であった女（兄弟の妻）も守るために作られたものです。しかし、サドカイ派の人々は、イエス様を困らせるために、この制度の目的ではなく形を取って、復活について尋ねます。今日の福音書28節から33節までがこの制度についてのサドカイ派の人々の質問です。長い質問ですが、簡単に言うと、レビラート婚をした人々は、復活するとき誰と夫婦になるのかということです。これはファリサイ派の復活の難題を取り上げたものとして、イエス様が答えられないようにするための質問でした。しかし、イエス様は彼らの予想とは違い、復活について答えられます。34～35節の言葉です。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。」

イエス様が教えてくださった復活は、ファリサイ派の復活とは違うものでした。まずイエス様は、復活はこの世に属しているのではないということを教えてください。復活によって、この世界のことが次の世界につながるのではなく、復活した人はこの世界のことをしないとされます。だから、サドカイ派の主張のように、レビラート婚による問題は起こらないでしょう。レビラート婚は当時の人々に必要だった法律であり、神の国で必要な法律ではないからです。そしてイエス様は、復活した者がどんな存在であるかを教えてください。36節の言葉です。「この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」

イエス様は、復活した人はもはや死なないと言われます。また、天使と等しい存在、しかし天使とは違うもの、神の子になるとおっしゃいます。これは、復活が私たちに与える神秘と特別さを示しているだけでなく、神の子は、血統ではなく復活によって与えられるものだということを示しています。つまり、復活を否定しているサドカイ派の人の主張がどれほど傲慢なことかを話しておられるのです。そしてイエス様は、モーセの書にも死者の復活が示されていると言われます。今日の福音書37-38節です。「死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。」

これは、出エジプト記3章6節の言葉で、神様がご自分をモーセに紹介なさったときの言葉です。そして、出エジプト記は、サドカイ派の人々が聖書として受け入れたトーラーの一つです。このモーセの書には、神様にアブラハムなどの先祖の名が付いていますが、もし復活がなく、死がすべての終わりであったなら、神様はお墓に入った先祖の名を通してご自分を紹介なさらなかったでしょう。すでに死んで消えた者の神であれば、誰にもメリットにならなかったはずだからです。さらに、ご自分の紹介に使われた言葉の時制がみんな現在形です。アブラハムの神であった神ではなく、「アブラハムの神」です。神様はご自分について過去ではなく現在の時制で紹介されます。それでイエス様は「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」と言われたのでしょうか。神の国では、死んだ人がいないからです。

今日、私たちは全聖徒の日としてこの場に集まりました。そして、私たちと別れた者たち、死を迎えた人々を思い出して追悼し、礼拝をささげています。しかし、神様は今日の福音書を通して、私たちは死んだと思っても、神様の御前ではみんなが生きているということを教えてください。この世で生きている私たちのように、私たちの先祖も神の国ではみんな生きています。この世の体とは違う体で、天使と等しい存在、新しい存在として生きているのです。これは、私たちの死が終わりではないこと、必ず私たちも私たちの先祖のように復活することを教えてくれることです。そして復活した私たちは、神の国で生きている存在として永遠に生きるでしょう。ある方は、永遠に生きることもそんなに良いことだけではないと思うかもしれません。しかし、この世で生きている私たちが復活を完全に理解できないように、永遠の命も同じだと思います。もし永遠の命が気になるなら、紙に書いてポケットの奥に入れてください。そして、是非神の国に行かれて聞いてみてください。神の国に生きている私たちの先祖たちがよく答えてくださるのだと思います。復活の喜びがこの場に集まった皆様と共にありますように。生きている者の神様が私たちを導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン